

## 児童・青年の家庭生活に関する意識の分析 —— 家庭の満足度と家庭内諸変数との関連 ——

A survey on children and adolescents' views of their family lives :  
Relationships between the degree of satisfaction in the family  
and other intra-family factors

平 岡 恭 一\* 石 川 信 一\*  
Kyoichi HIRAOKA Shinichi ISHIKAWA

### 論文要旨

青森県の委託によって1988年度に行われた、小学生から大学生までを対象とする多面的な意識調査の結果のうち、家庭生活に関する部分について再分析を行った。家庭に対する満足度を基準変数とし、これと他の様々な家庭に関する問の回答との関連性を分析したところ、次のような結果が得られた。1) 家庭満足度との関連性が深いのは、戸籍的な家族構成や小遣いの額などの物理的な生活実態要因ではなく、より心理的、対人関係的な要因であった。2) 母親に比べて、父親との対話のあり方がより強く家庭満足度と関連していた。3) 家庭の保護機能に関する項目は比較的低い年齢で家庭満足度と関連性をもち、一方、社会化機能に関する項目は高い方の年齢で関連性をもっていた。

### 目的

子どもの発達・教育において、家庭もしくは家族の果たす役割が非常に大きいことは、万人の認めるところであろう。例えば、非行の原因として、家庭の中の要因が最も重要視されること（星野，1990）などは、このことを端的に物語っている。また、教育活動の領域としても、家庭教育は、学校教育、社会教育と共に重要な役割を果たしている（山下，1965）。

家庭がもつとされる機能は、性的（生殖的）、経済的、心理的なものなど、多岐にわたるが、その中で、子どもに関連した心理的な機能の特質としては、一般に次の二つがあげられている。1) 保護的機能——家庭には、社会の様々な圧力から子どもを保護し、情緒的に安定した安らぎの場を提供するという機能がある。それと共に、子どもの様々な要求や願望を充足してやる働きももっている。2) 社会化機能——その一方で、家庭は、将来子どもが社会に適応していけるように、その社会の文化を伝え、望ましい行動様式や規準を形成するという、いわば学習的な機能をもつのである。

子どもにとってどのような家庭が望ましいかに関する考察は、「居心地がよいこと」（丸岡，1977）、「楽しく、愛情に満ちていること」（高橋，1975）、「欲求が充足されていること」（長島，1962）など、上記の1) の機能に関連する特質をあげているものが多い。総理府による「世界青年意識調査」（1972）でも、家庭の満足度の要因が取り上げられていた。高橋（1975）が、家

\* 弘前大学教育学部心理学科教室

Department of Psychology, Faculty of Education, Hirosaki University

庭に満足している子どもに非行少年はいない、と述べているように、欲求が満たされ、楽しく、帰属感をもてる、すなわち満足できる家庭であることは、健全な精神発達の要件であり、家庭及び家族について考える上でのひとつの基準となりうるように思われる。

筆者らが属する青森県青少年問題研究会では、1988年度、青森県の委託を受け、県内の小学生から大学生まで、そして有職青年を対象に、日常生活全般に関する事項をはじめ、地域社会、国家社会に関する事項などについて、総合的かつ広範囲にわたる意識及び生活に関する調査を行った。そこでは家庭に関する質問項目もかなり多く準備され、家庭に対する満足度をきく質問も設けられていたが、残念なことに、結果の分析が質問毎の単純集計及びそれについての統計的検定に終わっており、より進んだ分析は行われていなかった。この点は、上述の総理府の調査でもほぼ同様であり、単純集計より深い分析はあまりなされていないようである。

自分の家庭に満足している子どもは、また不満を感じている子どもは、それぞれ家庭内の様々な事柄についてどの様に感じ、行動しているのであろうか。本研究は、このような点について、前述の1988年度の委託調査結果の分析をさらに進めようとするものである。すなわち、家庭の満足度を基準変数とし、この問の結果と、他の家庭に関する問に対する回答結果との連関を調べることにより、現代青少年の家庭に対する意識構造をより深く分析することが本研究の目的である。

## 方法

### 1. 調査の実施

調査の実施手続きについては、青森県青少年問題研究会(1989)による報告書、「青少年の意識に関する調査」に詳細に述べられているので、ここではその概略を述べるにとどめたい。調査地点としては、津軽地方と南部地方、都市部と郡部、産業基盤等について偏りのないように、県下全般の地域を網羅し、年齢的にもひろく小学校5年生から、中学2年、高校2年、大学2年生まで、及び有職青年を加えて、男子1,055人、女子771人の調査対象者を得た。調査は1988年後半から、1989年初め(弘前大学のみ)にかけて行われ、調査の実施には当該学校等の教員あるいは職員があたり、原則として設問を読み上げながら進めていった。分析された調査内容としては、家庭に関する事項、交友関係、学校に関する事項、将来の希望、趣味、身近な大人との対人関係、他人への思いやり、生活に対する満足度や、悩み、心配、生きがいなど生活領域全般に関する事項、地域への愛着度や社会への満足度など、国家社会に関する事項など、そして職場に関する事項(有職青年のみ)が含まれていた。

### 2. 結果の処理と分析

調査結果は、1989年の報告書のための分析に際し、すでに弘前大学情報処理センターに登録済みであるが、分析の便宜を考え、新たにパーソナルコンピュータにデータ登録し直された。登録されたデータはまず、男女毎に、小学生から有職青年までの所属別に単純集計され、データ登録に誤りのないことが確認された。

今回の分析の対象になった設問は、次のような家庭に関するものに限られている。なお、SAは単数回答、MAは複数回答を意味する。

- 問2. 親との同居、別居(SA) 問3. 父親の職業(SA) 問4. きょうだい数(SA)  
問5. きょうだいの何番目か(以下出生順位, SA) 問6. 母親の就労状態(SA) 問  
7. 家庭の悩みや心配ごとの有無(SA) 問9. 父親とよく話すか(SA) 問10. 前問

で話さない場合の理由 (MA) 問11. 母親とよく話すか (SA) 問12. 前問で話さない場合の理由 (MA) 問13. 家の中で次のようなこと (例えば, 父のようにになりたい, 将来のことについて親に話しかける, など11項目) を考えたり, することがあるか (各SA) 問14. 家庭の満足度 (SA) 問20. ひと月の小遣いの額 (SA)

以上の設問について, 実際の質問票の見本は, 付録を参照されたい。

この中から, 問14. 家庭の満足度を基準変数とし, これに対する回答結果とそのほかの設問への回答とのクロス集計表を作成し,  $\chi^2$  検定を行った。その際, 家庭の満足度に対する回答の分布 (表1 参照) について, 「どちらとも言えない」を無視し, 「非常に満足している」と「どちらかと言えば満足している」の回答数をまとめて新たに「満足」とし, 「どちらかと言えば不満である」と「非常に不満である」をまとめて「不満」として, 以後すべての分析にこの分類を用いた。さらに, この他の設問についても, そのままでは周辺度数が0になって  $\chi^2$  検定ができない場合など, 適宜選択肢をまとめ, 新たな分布を作成して分析を行った。

表1 家庭の満足度の回答分布

	全体	非常に満足	どちらかと言えば満足	どちらとも言えない	どちらかと言えば不満	非常に不満	
小5	296	126	107	38	22	3	(人)
中2	375	76	131	124	32	12	
高2	512	76	189	150	72	25	
大2	462	79	241	112	22	8	
男子	976	214	398	256	83	25	
女子	669	143	270	168	65	23	

年齢の効果をみるため, 小5, 中2, 高2, 大2の所属別に上述のクロス集計を行った。有職青年については, 年齢の散らばりが大きすぎるため, 分析から除いた。さらに性による違いをみるため, 小学生から大学生までをまとめて, 男女別に分析した。

## 結果

調査結果の効果的な把握を促進するため, 分析された設問を3つの群, すなわち, 1. 家庭生活実態, 2. 親との対話, 3. 家庭内での意識や行動, にまとめた。

### 1. 家庭生活実態と家庭満足度 (問2～問6, 問20)

ここでは, 戸籍的及び生活形式的な実態に関する項目への回答と, 家庭満足度との関連を調べた。

まず, 親との同居, 別居等の実態と家庭満足度との関連をみよう (図1)。小5から高2までは親と一緒に圧倒的に多く, 満足群と不満足群で差はみられないが, 大2, 男子, 女子において, 満足群の方が親と離れている割合が高い傾向がみられる。4つの回答カテゴリー×満足・不満の  $\chi^2$  (df = 3) 検定の結果

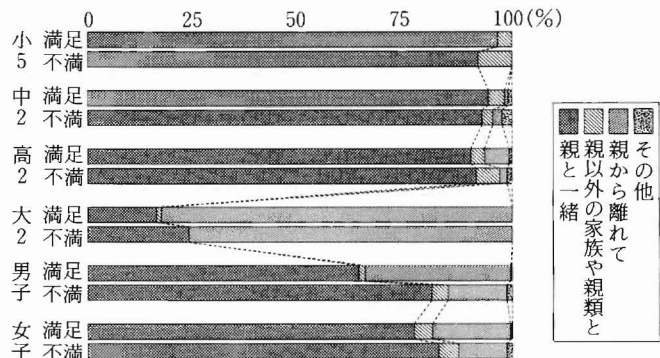


図1 親との同居・別居の実態と家庭満足

は、男子においてのみ有意であった ( $\chi^2=19.27$ ,  $p<.01$ )。

次に、表 2 は、母親の就業状態と家庭満足度との関連を示している。小 5 において、母親が家の仕事（家事や家の商売など）をしている場合は満足群の方が有意に多く、毎日働きに行く場合は不満足の方が有意に多かった。しかし中 2 以降、及び性別にまとめた場合には有意な関連はみられない。

表 2 母親の就労状態と家庭満足度

		人数	家の仕事	時々働き に行く	毎日働き に行く	母はいない	その他	
小 5	満足	231人	53.7 <sup>1)</sup>	2.6	38.1 <sup>2)</sup>	2.2	3.5	(%)
	不満	25	32.0	0.0	60.0	4.0	4.0	
中 2	満足	205	51.7	4.9	38.0	1.5	3.9	
	不満	43	53.5	4.7	30.2	4.7	7.0	
高 2	満足	265	47.9	4.2	42.3	1.5	4.2	
	不満	96	49.0	3.1	41.7	2.1	4.2	
大 2	満足	318	55.3	6.3	34.6	0.6	3.1	
	不満	30	43.3	6.7	36.7	3.3	10.0	
男子	満足	608	52.1	5.4	36.5	1.5	4.4	
	不満	107	46.7	4.7	41.1	3.7	3.7	
女子	満足	411	52.6	3.4	40.4	1.2	2.4	
	不満	87	47.1	2.3	40.2	2.3	8.0	

註 1)  $\chi^2=4.25$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ; 2)  $\chi^2=13.35$ ,  $df=1$ ,  $p<.01$

きょうだい構成に関する最初の設問は、きょうだい数をきいたものである(図 2)。学年別、及び性別にみても、回答分布にあまり大きな違いはみられず、4 カテゴリーと満足度との関連 ( $\chi^2$ ,  $df=3$ ) も有意なものはない。

続く図 3 は、出生順位と満足度の関連を示している。学年が低いうちは満足度とのはっきり

した関連はみられないが、高 2、大 2 と学年が進むにつれ、満足群に長子が多くなる傾向が認められる。4 カテゴリー×満足・不満の  $\chi^2$  は、男子について有意であった ( $\chi^2=9.23$ ,  $df=3$ ,  $p<.05$ )。

この他、保護者の職業、及び小遣いの額についても分析されたが、家庭への満足度との関連で注目すべき結果は得られなかった(図表略)。

2. 親との対話と家庭満足度 (問 9～問12)

まず父及び母との対話の状況と家庭の満足度との関連からみてみよう(図 4、5)。ここでは、父親(または母親)と「非常によく話す」と「よく話す方だ」をまとめて「よく話す」とし、「あ

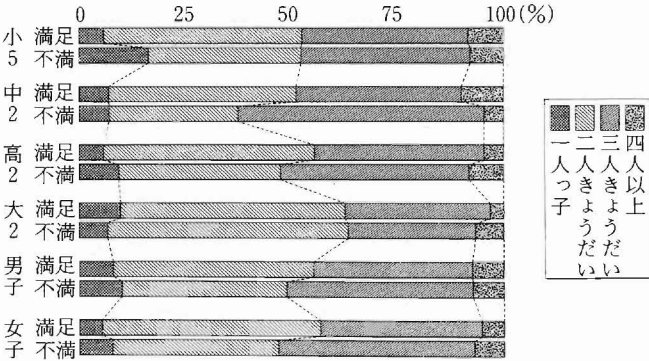


図 2 きょうだい数と家庭満足度

まり話さない方だ」と「全然話さない」を「話さない」にまとめて分析した。なお、「お父さん(またはお母さん)はいない」は除いた。満足群が父親とよく話す割合は、学年別、性別全ての場合において、半数を大きく上回っているが、不満群では逆に半数を下回っている。 $\chi^2(df=1)$ 検定の結果は、学年別、性別全ての分類において1%水準で有意であった( $\chi^2$ 値:小5 21.35, 中2 15.17, 高2 67.06, 大2 32.28, 男子 85.09, 女子 53.14)。

一方、母親とよく話す割合は、満足、不満、いずれの群においても、70%近くに達し、あるいはそれを大きく上回っており、全般的に父親よりもよく話している傾向が読みとれる。それでも満足度との関連( $\chi^2, df=1$ )をみると、学年別、性別のほとんどの分類において1%水準(中2のみ5%水準)で有意であったが( $\chi^2$ 値:小5 28.85, 中2 5.38, 高2 21.84, 男子 29.83, 女子 24.72), 大学生では有意に至らなかった。

次に、父または母と「話さない」と答えた場合にその理由をたずねた結果を表3と表4に示す。まず父親についてみると、「わかってこない」、「たよりにならない」、「すぐ怒る」、「うるさがる」など、親の側の理由については、不満群での割合が高く、中2を除く分類についてかなり多く有意な関連がみられているが、「話す機会がない」については逆に満足群に多くみられ、男子と女子においてのみ有意であった。

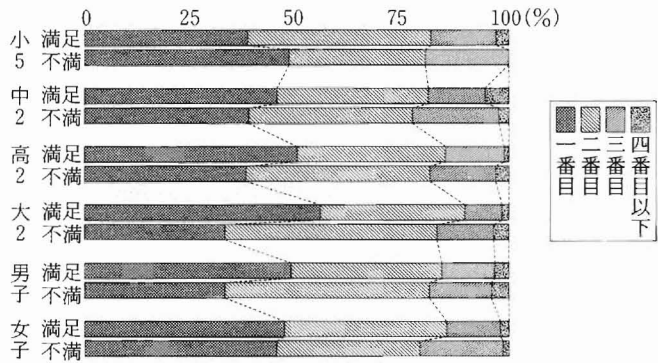


図3 出生順位と家庭満足度

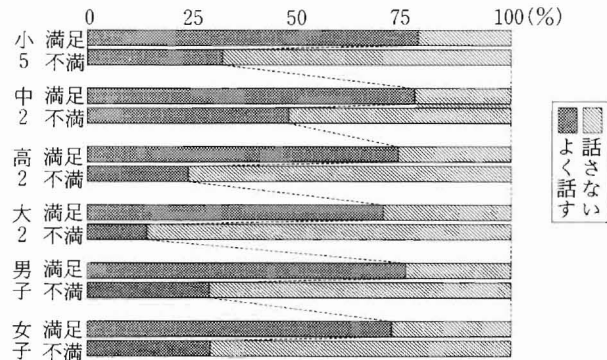


図4 父親との対話と家庭満足度

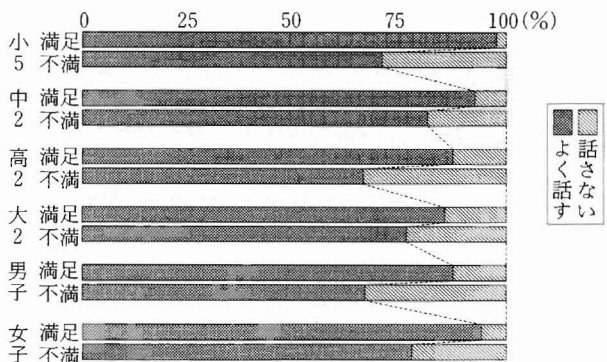


図5 母親との対話と家庭満足度

表3 父親と話さない理由と家庭満足度

	人数	はずかしい	わかってくれない	たよりにならない	すぐ怒る	うるさがる	話すことがない	話す機会がない	その他
小5	満足 48人	12.5	8.3	6.3	6.3	6.3	39.6	45.8	10.4 (%)
	不満 15	6.7	26.7	33.3	46.7	33.3	33.3	33.3	6.7
	$\chi^2$	—	—	5.32 *	11.12**	5.32 *	—	—	—
中2	満足 43	14.0	4.7	0.0	16.3	4.7	62.8	51.2	4.7
	不満 23	8.7	21.7	13.0	26.1	17.4	47.8	30.4	0.0
高2	満足 66	7.6	6.1	1.5	4.5	0.0	65.2	34.8	7.6
	不満 66	1.5	21.2	16.7	18.2	12.1	63.6	21.2	7.6
	$\chi^2$	—	5.21 *	7.43**	4.81 *	6.52 *	—	—	—
大2	満足 93	7.5	3.2	4.3	1.1	2.2	38.7	55.9	6.5
	不満 24	4.2	25.0	12.5	16.7	4.2	29.2	37.5	8.3
	$\chi^2$	—	9.86**	—	7.85**	—	—	—	—
男子	満足 142	8.5	4.9	2.1	4.2	1.4	46.5	46.5	7.7
	不満 73	2.7	21.9	13.7	26.0	13.7	53.4	24.7	4.1
	$\chi^2$	—	14.57**	9.44**	22.30**	11.59**	—	9.64**	—
女子	満足 108	11.1	5.6	4.6	7.4	4.6	54.6	49.1	6.5
	不満 55	5.5	23.6	21.8	18.2	14.5	47.3	30.9	9.1
	$\chi^2$	—	11.57**	9.76**	4.31 *	—	—	4.91 *	—

註)  $\chi^2$ の自由度は1で、\*は5%水準、\*\*は1%水準で有意であること、—は有意でないことを示す。

表4 母親と話さない理由と家庭満足度

	人数	はずかしい	わかってくれない	たよりにならない	すぐ怒る	うるさがる	話すことがない	話す機会がない	その他
小5	満足 5人	0.0	20.0	20.0	20.0	40.0	20.0	40.0	0.0 (%)
	不満 7	0.0	42.9	57.1	28.6	42.9	42.9	42.9	14.3
中2	満足 15	6.7	13.3	0.0	6.7	6.7	60.0	13.3	0.0
	不満 8	0.0	12.5	12.5	25.0	37.5	37.5	12.5	25.0
高2	満足 32	0.0	6.3	6.3	12.5	6.3	68.8	15.6	9.4
	不満 32	0.0	21.9	12.5	18.8	3.1	65.6	15.6	12.5
大2	満足 44	13.6	9.1	2.3	2.3	2.3	43.2	40.9	2.3
	不満 7	28.6	0.0	14.3	0.0	0.0	42.9	14.3	28.6
男子	満足 73	9.6	4.1	2.7	5.5	6.8	61.6	20.5	4.1
	不満 35	5.7	8.6	14.3	14.3	5.7	51.4	14.3	20.0
女子	満足 23	0.0	26.1	8.7	13.0	4.3	26.1 <sup>1)</sup>	52.2	4.3
	不満 20	0.0	42.1	26.3	26.3	26.3	63.2	26.3	10.5

註 1)  $\chi^2=5.06$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$

母親については、父親の場合と似たような数値の全体的傾向がみられるものの、満足度との関連が有意になったのは、「話すことがない」の女子のみであった。このように有意な結果が少なかった理由としては、母親と話さない人数が元々少なかったことによる統計的アーチファクトがあげられるが、しかし、高2や男子ではかなり実質的な標本数が得られていることを勘案すると、やはり父親に比べて一般に満足度との関連性が薄いことも否定できないように思われる。

以上まとめると、特に父親との対話のあり方が、家庭の満足・不満と強い関係をもっていることが示されたといえよう。

### 3. 家庭内での意識や行動と満足度 (問13, 7)

表5は、そのほかの様々な項目(問13)について満足度との関連を示している。学年別、性別の全ての分類について有意な関連性を示した項目は、まず「父(または母)のような人になりたい」で、これらの割合は満足群で高くなっている。さらに、「親から愛されてない」、「厳しすぎる」、「勉強にうるさい」、「気まぐれだ」も全ての分類で有意となっているが、但し、その割合は不満群で高い。「父は母の言いなりだ」も同じ傾向の項目と思われるが、高2のみ満足度によってほとんど変わらない。かなり明らかな学年差がみられたものとしては、まず「将来の事で親に話しかける」、「親と心をわって話したい」、「親が自分の言いなりだ」の3つがあげられる。これらは、学年の低いうちは満足度との間に関連性がみられないが、学年が進むと、前者2つは満足群が、最後の1つは不満群で割合が高くなる方向で、有意な関連性を示した。一方「何をしても親は気にしない」は、逆に小学生でのみ不満群での割合が高く、有意な関連性がみられたが、中2以降は、満足度による差がみられなくなっていった。またこの項目のみ性差がみられ、女子では有意であったが、男子では差がなかった。

表5 家庭についての様々な意識や行動と家庭満足度

		父のよう な人にな りたい	母のよう な人にな りたい	将来の事 で親に話 しかける	親と心を わって話 したい	親が自分 の言いな りだ	親から愛 されてい ない	両親が厳 しすぎる	親が勉強 について うるさい	何をしても 親は気に しない	親は気ま ぐれだ	父は母の 言いなり だ
小 5	満足	51.1 (229)	49.4 (233)	58.8 (233)	45.1 (233)	3.9 (233)	10.0 (231)	16.3 (233)	24.1 (232)	19.7 (233)	12.4 (233)	5.7 (230)
	不満	12.0 (25)	26.1 (23)	44.0 (25)	44.0 (25)	8.0 (25)	37.5 (24)	64.0 (25)	60.0 (25)	48.0 (25)	40.0 (25)	21.7 (23)
	$\chi^2$	12.30**	4.55*	—	—	—	15.03**	31.03**	14.52**	10.34**	13.36**	5.93*
中 2	満足	49.2 (197)	49.7 (197)	60.6 (203)	43.2 (199)	7.1 (198)	11.1 (199)	12.5 (200)	19.6 (199)	24.9 (201)	17.7 (203)	5.1 (197)
	不満	22.7 (44)	20.5 (44)	47.7 (44)	34.1 (44)	11.4 (44)	27.9 (43)	50.0 (44)	38.6 (44)	38.6 (44)	61.4 (44)	25.0 (44)
	$\chi^2$	10.24**	12.50**	—	—	—	8.32**	32.61**	7.36**	—	36.23**	17.95**
高 2	満足	48.3 (259)	45.6 (261)	71.2 (264)	57.0 (263)	4.9 (263)	7.2 (264)	11.7 (264)	17.0 (264)	24.3 (263)	22.7 (264)	7.7 (259)
	不満	9.5 (95)	19.1 (94)	50.0 (96)	37.5 (96)	5.9 (96)	25.0 (96)	38.9 (95)	30.2 (96)	28.1 (96)	45.8 (96)	8.4 (95)
	$\chi^2$	44.45**	20.39**	14.03**	10.75**	—	21.21**	33.68**	7.47**	—	18.30**	—
大 2	満足	63.0 (319)	59.4 (315)	71.8 (319)	67.1 (319)	8.2 (319)	6.6 (319)	11.9 (319)	14.4 (319)	23.2 (319)	19.4 (319)	5.4 (315)
	不満	14.3 (28)	32.1 (28)	44.8 (29)	37.9 (29)	24.1 (29)	25.0 (28)	31.0 (29)	31.0 (29)	27.6 (29)	58.6 (29)	20.7 (29)
	$\chi^2$	23.30**	7.78**	9.12**	9.89**	7.92**	11.77**	8.32**	5.51*	—	23.36**	9.95**
男 子	満足	60.9 (609)	44.3 (600)	61.5 (608)	52.1 (607)	7.3 (606)	8.4 (606)	12.2 (607)	19.6 (608)	24.2 (608)	16.9 (608)	5.7 (599)
	不満	20.0 (105)	16.7 (102)	39.6 (106)	31.1 (106)	12.3 (106)	26.0 (104)	42.9 (105)	43.4 (106)	32.1 (106)	42.5 (106)	11.5 (104)
	$\chi^2$	60.57**	27.73**	17.79**	15.82**	—	27.94**	60.47**	28.83**	—	35.75**	4.98*
女 子	満足	42.8 (395)	62.3 (406)	73.7 (411)	58.7 (407)	4.4 (407)	8.4 (407)	14.2 (409)	16.5 (406)	21.3 (408)	20.4 (411)	6.5 (412)
	不満	5.7 (87)	28.7 (87)	58.0 (88)	45.5 (88)	6.8 (88)	28.7 (87)	44.3 (88)	27.3 (88)	34.1 (88)	60.2 (88)	20.7 (87)
	$\chi^2$	40.81**	32.85**	8.74**	5.18*	—	28.31**	41.87**	5.58*	6.55*	57.61**	17.67**

註) 数値上段は「ある」の%、下段カッコの中は「ある」+「ない」の全体数を示す。 $\chi^2$ の自由度は1で、\*は5%水準、\*\*は1%水準で有意であること、—は有意でないことを示す。

最後に、家庭について悩みや心配ごとがあるかどうかをきいた設問（問7）への回答と、満足度との関連を調べたところ、学年別、性別全ての分類において、悩みや心配ごとがある割合は不満群において圧倒的に多く、その $\chi^2$ も全ての場合において1%水準をはるかに越えて有意であった。この結果はいわば当然とも考えられ、特別新しい情報を与えてくれるとも思われないので、図表を省略した。

## 考察

### 1. 生活実態と家庭の満足度

本研究で家庭への満足度とクロスさせられた設問項目は、親との同居・別居状態、親の就業状態、戸籍的なきょうだい構成、そして小遣いの額に至る純粋な生活実態に関する項目と、それ以外の、より人間関係の内容を濃く反映した項目とに分けることができよう。分析の結果、生活実態に関する回答は、それ以外の設問に対する回答に比べ、満足度との関連性は薄かった。

このような結果は、分析前には予想しなかったものである。というのは、例えば、きょうだい関係が人格形成に大きく影響するという研究結果（依田、1990）から考えると、きょうだい数や出生順位などの変数は、家庭の満足度とも強い関係をもつのではないかと予測されるであろうし、小遣いの額なども少なくとも学年の低い間は満足度と関連をもつであろうと考えられたからである。結局この分析結果は、生活の物理的な実態そのものが直接に家庭の満足度と強く関係するものではないことを示しているであろう。そして、家庭満足度という主観的な評価は、むしろ親との対話や、子どもに対する親の様々な接し方など、家庭の中でもより対人関係的な側面と強く関係していることを示唆するものである。

しかしそのような生活実態項目の中でも、わずかではあるが、興味深い関連性が見いだされた。例えば、男子において、親と離れていることと家庭に満足していることが結び付いていた。後の分析の中で（表5）、親が厳しすぎたり、勉強の事でうるさく言われる割合は、不満群の方で多いことが見いだされている。親と同じ屋根の下で暮らしていれば、いろいろと口うるさく言われ、それが家庭の不満につながることもあろう。むしろ離れている方が家庭の良さを感じることができるのかもしれない。このことは、親からの自立期にある青年たちの微妙な家庭観を反映しているようで興味深い。

### 2. 父親との対話の役割

親との対話の程度と満足度との関連は、父親の方が大きく、家庭に満足している群では対話が多いが、不満群ではそれよりずっと少なくなっていた。母親との対話の程度と満足度との関連性は、これより若干薄いようであるが、それは家庭において母親の役割が低いのではなく、満足群、不満群、いずれにしても家庭において重要な位置を占め、むしろ子どもとよく対話していることを意味しているのである。父親は、家庭内において比較的影が薄いといわれることが多いが（田中、1991）、であるからこそ父親との対話は、子供の家庭への満足度と重要な関係をもっているのである。その意味でこの結果は、父親の役割の重要性を示唆しているだろう。

総務庁の調査（1987）によれば、父子間に高頻度の接触をもつ父親は、低頻度の父親に比べて、子供から好意的に思われているという。今回の分析結果は、父子のコミュニケーションが、父親自身に対する好意度のみならず、それを含む家庭全体の満足度とも強い関係をもつことを明らかにしたものであり、これまでの知見を拡張したものといえよう。

### 3. 発達の示唆



坪内（1983）は家庭機能の発達的变化のモデルを提出し、目的のところ述べて二つの機能のうちの、保護機能は年齢と共に低下していくが、社会化機能はある年齢までは増加していくと述べている。ある機能が強く作用し、それが子どもの潜在的な要求に関わるものであるならば、家庭への満足度との関連性をもつことが多くなるであろう。そのような観点から、今回分析した年齢範囲において、関連性の学年的変化がみられた項目についてみてみよう。

まず、「自分の将来の事について親に話しかける」や「親と心を割って話したいと思う」ことがあるとする割合と、満足度との間の関連性は、学年が進むにつれて強くなっていき、満足群の割合が高かった。これらの項目は、親からいろいろなことを学ぶであろうという点で、どちらかというと社会化機能に関連したものと思われる。これらが学年の高い方で、満足度との関連性が強くなっていくことは、坪内のモデルに一致したものといえよう。また「親が自分の言いなりになりすぎると思う」様な状態にあると、これは期待される社会化機能を親が果たしていないことになり、そのような割合が学年の高い方でのみ、不満群において多くなっているという分析結果もまた、このモデルから予測されることであろう。

一方、母親の就業状態と満足度との間に有意な関連がみられたのは低学年（小5）のみであり、母親が家にいる場合は満足に、毎日外に働きに行く場合は不満に傾いていた。母親が家にいるかどうかは保護機能に関わると考えられるので、この結果も坪内のモデルに一致しているといえる。同様に小5でのみ有意な関連がみられたのは、「自分が何をしても親はあまり気にしないと思う」割合であるが、この項目は、愛情のなさや人間的関係の希薄さを意味するならば保護機能に関係するものであるが、一方社会化機能の欠如を意味するとも考えられ、どの機能が特定不能であるので、明確に結論づけるのは難しい。

以上のように、保護機能から社会化機能へという家庭機能の発達的变化は、今回分析された範囲でみる限り、満足度との関連を通して、概ね支持されるように思われる。

## 結語

この分析に用いられた調査は、様々な点について資料が片寄らないように留意されてはいたが、青森県という一地方に限られたものであり、そういう意味での一般性には疑問が残る。しかし家庭への満足度を中心とした今回の分析は、これまでにない形で、家庭内の意識構造を明らかにしてくれたといえよう。今日の家庭像を考える参考になれば幸いである。

## 文献

- 青森県青少年問題研究会 1989「青少年の意識に関する調査」青森県  
 総務庁青少年対策本部 1972「世界青年意識調査」  
 総務庁青少年対策本部 1987「日本の父親と子ども一細分析報告・資料編、アメリカ・西ドイツとの比較」  
 高橋茂雄 1975 親と子の心理 共同出版  
 田中宏二 1991 父子関係 松田 惺（編）新児童心理学講座12 家族関係と子ども 金子書房 Pp.73-105  
 坪内宏介 1983 青年と家庭 依田明・安香宏（編）青年心理学入門 新曜社 Pp.66-83  
 長島貞夫 1962 児童社会心理学 牧書店  
 星野周弘 1990 非行の原因と非行防止活動 青少年非行問題研究会（編）青少年の非行問題 ぎょうせい Pp.225-254  
 丸岡秀子 1977 現代の家庭と教育 青木書店

山下俊郎 1965 家庭教育 光生館  
 依田 明 1990 きょうだいの研究 大日本図書

## 付録

### おねがい

この調査は、今の青少年たちがどんな行動をしているかについて、ありのままの姿を知るためにおたずねするものです。どのように答えても、あなたのめいわくになるようなことは、けっしてありません。また、なまえも書く必要はありません。思っているとおりに答えてください。

問には、あてはまる答えのところに○印をつけてください。また、( )の中には答えを書いてください。まえにつけた○印がまちがっていたときには、その○印のうえに×印をつけてから正しい答えに○印をつけてください。

青森県生活福祉部青少年婦人室  
 青森県青少年問題研究会

市町村名\_\_\_\_\_ (市・町・村) 学校名\_\_\_\_\_

性別 (男・女) 年令 満\_\_\_\_歳

(問1、問8、問21、問22、問31、問32、問34を削除)

### 第一部

問2 あなたはいまどのように生活していますか。あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

1. おやといっしょに生活している。
2. おや以外の家族や親類といっしょに生活している。
3. おやから離れて生活している。
4. そ の 他

問3 あなたのお父さん (いない場合は、お母さんが保護者) の職業は次のどれになりますか。

あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

1. 公務員 (市役所や役場の職員)
2. 会社員 (事務やセールス関係)
3. 自由業 (画家、音楽家、作家、デザイナー、コピーライター、イラストレーター)
4. 専門職 (弁護士、医者、科学者、看護婦、薬剤師、教師、技師など)
5. 商工業自営 (自分の家で商店や工場や飲食店をやっている)
6. 農林漁業
7. 商店につとめている (デパートやスーパーの店員など)
8. 職人 (植木、大工、左官、洋裁師、和裁師など) か 工員 (溶接工、自動車整備工、板金工など)

9. サービス職業（警察官、消防士、美容師、理容師など）
10. 運輸的職業（パイロット、船員、バスや電車の運転手、車掌、スチュワーデスなど）
11. 出 稼 ぎ
12. 働いていない
13. そ の 他（                      ）

問4 あなたは何人きょうだいですか。自分を含めた数であてはまるもの一つに○をつけて下さい。

1. ひとりっこ
2. 二人きょうだい
3. 三人きょうだい
4. 四人きょうだい
5. 五 人 以 上

問5 あなたはきょうだいの何番目ですか。あてはまるものに○をつけて下さい。

1. 一 番 目（ひとりっこの場合を含む）
2. 二 番 目
3. 三 番 目
4. 四 番 目
5. 五番目以下

問6 あなたのお母さんは、一日中、おもにどうしていますか。あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

1. 家の仕事（家事や家の商売、家の工場、家の農業や漁業など）をしている。
2. ときどき（週4日まで）よそへ働きに行く。
3. 毎日（週5日以上）、よそへ働きに行く。
4. 母はいない。
5. そ の 他（                      ）

問7 あなたの家について悩みや心配ごとがありますか。あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

1. 大いにある。
2. あ              る。
3. あまりない。
4. まったくない。
5. 家庭はない。

問9 お父さんとあなたはよく話しをするほうですか。それとも話さないほうですか。あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

1. 非常によく話すほうだ。



2. 母のような人になりたい。	あ	る	な	い
3. 自分の将来のことについて親に話しかける。	あ	る	な	い
4. 親と心をわって話したいと思う。	あ	る	な	い
5. 親が自分のいいなりにすぎると思う。	あ	る	な	い
6. 親から愛されていないと感ずる。	あ	る	な	い
7. 両親が厳しすぎると思う。	あ	る	な	い
8. 親が勉強についてうるさく言いすぎると思う。	あ	る	な	い
9. 自分が何をしても親はあまり気にしないと思う。	あ	る	な	い
10. 親の言うことは気まぐれであると思う。	あ	る	な	い
11. お父さんはお母さんの言いなりだと思う。	あ	る	な	い

問14 あなたは自分の家庭をどのように思っていますか。あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

1. 非常に満足している。
2. どちらかと言えば満足している。
3. どちらとも言えない。
4. どちらかと言えば不満である。
5. 非常に不満である。
6. 家庭はない。

問20 あなたは一月にどのくらいのおこずかいを使いますか。あてはまるもの一つに○をつけて下さい。

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1. 500円まで        | 6. 10,001～20,000円 |
| 2. 501～ 1,000円   | 7. 20,001円以上      |
| 3. 1,001～ 3,000円 | 8. 毎月きまっていない。     |
| 4. 3,001～ 5,000円 | 9. おこづかいはない。      |
| 5. 5,001～10,000円 |                   |